

草庵仏教

第139号
(発行日)
2002年1月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

人間愛を包む大悲

N 「よく神の愛とか仏の慈悲とか言われますが、そういう愛は人間生活に必要なのでしょうか」
D 「神の愛はともかく、仏の慈悲は私には無くてならぬものです」

N 「私たちは普通、人間同士の愛の中で生きていますが、それだけではダメなんですか」
D 「ダメと言うより、人間愛には限界があると思います」

N 「限界という意味は？」
D 「人間愛はうつろいゆき、しばしばものたらず、時には逆に憎しみに変わります」

N 「どのようなものを人間愛と言うのでしょうか」
D 「一番身近で代表的なのが、親子の愛とか夫婦の愛ですね。外にも友情とか師弟愛などもあります。親子がいたわり合い夫婦が愛し合うのはとてもうるわしく素晴らしいものです。今日のように人間関係が希薄な世の中では、親子や夫婦が仲良く愛し合っている家庭は、砂漠の中のオアシスのように人にとってやすらぎの場となります」

N 「そういう人間同士の愛にもなお限界があると言われるのはどういふことでしょうか」
D 「一番よく分かるのは、仏教

で〈愛別離苦〉といわれていることです。愛別離苦とは愛するものと別離する悲しみのことです。中でも死別です。愛する子供を亡くすとか、親を亡くすとか、妻を亡くすとか、夫を亡くすとか、あるいは兄弟を亡くすとかいふ悲しみです。それは愛し愛される対象を永遠に失うことです」

N 「妻に先立たれて、生きる気力を失ってしまう老人がよくありますね」
D 「ええ。作家の江藤淳さんが典型的な方だったと言われています。氏は慶子夫人が病没した三ヶ月後に自らの命を絶ちました。平成十一年のことです。氏の遺書ともいわれる『妻と私』という作品には、最愛の妻の命が終われば、全ては終わってしまうという哀感が描かれています。

「誰に言うともなく、家内は、『もうなにもかも、みんな終わってしまった』とつぶやいた。その寂寥に充ちた深い響きに対して、私は返す言葉もなかった。実は私もまた、どうすることもできぬままへみんな終わってしまった」ことを、そのとき心の底から思い知らされていた

からである。(中略)
薬のせいで気分がよいのか、家内が穏やかな微笑を浮かべて、私を見詰め、
『ずい分いろいろな所へいったわね』
といった。(中略)
『本当にそうだね。みんなそれぞれに面白かったね』
と、私は答えたが、「また行こうね」とはどうしてもいえなかった。その代わりに涙が迸り出てきたので、私はキチネットに姿を隠した」
(江藤淳「妻と私」より)
夫人が亡くなられて

『家内の生命が尽きていない限りは、生命の尽きるそのときまで一緒にいる、決して家内をひとりぼっちにはしない、という明瞭な目標があったのに、家内が逝ってしまったいまとなっては、そんな目標などどこにもあひはない。ただ私だけの死の時間が、私の心身を捕らえ、意味のない死に向かって一刻と私を追い込んで行くのである』
(同上)

と氏は書きつづっています」
N 「それほど夫婦がお互いに愛し合っていたのですね」
D 「ええ、一卵性夫婦とよばれるほど、仲のよいご夫婦だったとのことですね」
N 「それゆえ、奥さんが逝ってしまったって、生きる目標をなくされたのですね」

D 「ええ、夫婦愛を生きる支えにされてしまったから、死別には堪えられなかったのですね。スイスの哲学者のカール・ヒルティは

『(人間の)愛情の幸福にすっかり身をゆだねる人の心情が深いほど、その人は確実に、そして完全に、不幸になるであろう』
という洞察をしています。人間愛に身をまかせている人は、必ず来る別れによって悲嘆の底に落とされてしまいます」
N 「ここで〈愛情にすっかり身をゆだねる〉というのは、人間愛を生きる支えにし自分の幸福の源にすることですね」
D 「ええそうです。人間同士の愛情はとても大切ですし、人生の大きな喜びであり慰めです。しかし、その愛の関係を全人生の支えとしてしまいますと、やがて大きな悲嘆がまっています」
N 「このことは自分の子供に人生の主な生き甲斐を求める親の問題でもありますね」
「かけあう愛情が深ければ深いほど悲しみにあう度合いも大きいという、そういう問題が人間愛にはあります。
この点について釈尊は出家の弟子に対してですが次のような説法をしておられます。

* 愛するものと会うな。愛していないものとも会うな。愛するものを見るのも苦しい。

*愛する人々と離れるが故に、また愛しない人々に会うが故に、はげしい憂いが起こる。それによつて人々は老いやつれてゆく。

*時が来て、愛する人が死ぬと、親族知人が集まって来て、長い夜を徹して悲しむ。実に愛するものと会うことは苦しい。

*それ故に、愛するものをつくつてはならぬ。愛するものであるということはわざわいである。愛するものも憎むものも存在しない人々には、わずらいの絆は存在しない。

(岩波文庫「真理のことば・感興のことば」一七八頁)

N「釈尊は人が人を愛することを否定しておられるのでしょうか」

D「釈尊がここで説かれる愛は、愛執と言う方が分かりやすいでしょう。私たち凡夫が人を愛する愛情には愛執ともいうべき深い執着があります。この愛執ゆえに愛するものとの別れは憂苦が生じると言われるのです」

N「だからといって人間同士が愛し合わず、愛することをしなくなる、もうそれこそ人生全体が淋しい荒野のようになってしまふように私は思うのですが」
D「人間は人を愛さずにおれない存在ですから、愛することをやめることはできません。ただ

凡夫の愛には自他にたいする深い執着がありますから、苦しみの因となるのです。ただししかし愛が純化され、愛執を浄化されたなら、それはまことの慈悲といわれるのです」

N「私たちの親子の愛情・夫婦の愛情・男女の愛情には愛執ともいふべき執着があるのですね。愛執のない愛情である慈悲というのはどういふものでしょうか」

D「菩薩や仏の慈悲は愛執というこだわりを離れ、しかも、苦しむ者、悲しむ者に純粹に共感し、その苦しみを除き、純粹な安らぎを与えようとするいつくしみ心です」

N「そういう純粹な慈悲としての愛は凡夫には大変難しいことですね」

D「ええ、純粹な慈悲の心を起こすことは凡夫には難しいことです。ですから凡夫はどこまでも人間愛ゆえの苦しみや悲しみや嘆きから解放されません」

N「凡夫はどこまでも愛執を含んだ人間愛でしか人を愛せない。そうすると愛するゆえの悲しみや苦しみにどこまでもあつていかねばならないのですね」

D「そこなんです。凡夫の愛は人間愛でしかありませんが、しかし人間愛ゆえに苦しみ悲しんでいる私たちを大悲したもう大慈大悲の仏のましますこと、それをお知らせ下さるのがまた釈尊なのです。さきほど釈尊の言

葉を引用しましたように、釈尊は人間愛のゆに苦しむことを出家修行者への説法の中でお説きになりました。しかし一方で、なんらの修行もできずいつまでも人間愛ゆえに苦悩する凡夫のために、その苦悩の凡夫をあわれみたまう大慈大悲の阿弥陀仏のましますことを説いて下さいました。それが浄土の経典です」

N「私たちが大悲の阿弥陀仏の存在を知り、阿弥陀仏の慈悲にふれるとどうなるのでしょうか」

D「一生、人間愛でしか生きられない私たちですから憂苦はなくなりません。けれども、その憂苦が返つて仏の大慈大悲に包まれていく我が身であることを知らされ、大いなる慈悲の慰めを与えられていくのであります。そこに私どもは別離の悲しみや寂しさや嘆きに堪えていくことができるのではないのでしょうか。正信偈に

『大悲無倦常照我』(大悲倦きことなく、常に我を照らしたまう)

と聖人は申されています。苦悩する私にどこまでも寄り添いたもう永遠の大悲の親がましますことは、愛執からの憂苦を大いに和らげて下さいましう」

(了)

〈任職つれづれ日誌〉

今年の重大ニュースのトップはアメリカのテロ事件であろう。アメリカのメンツをかけての報復攻撃の中で今年も終わろうとしている。

十一月三十日。天満敦子のヴァイオリン演奏会へ妻と三宮へ行く。天満さんの演奏会に出かけたきっかけは彼女のファンである島根県のF師の強い薦めによつてである。

彼女の得意とする曲は感情表現が濃厚なジプシー系の曲のように思われる。ストラディバリウスの弓さばきが男性的で、ビュンビュンと波打つように弦に当てられていく、その技巧はたいしたものである。最後に例の「望郷のバラード」が奏でられたが、終わった瞬間からしばらくは異常なほどの沈黙が続いて、息をおさえるのに苦労をするほどだった。終了後、サイン会があつて多くの人が長い列を作っていた。たいした人気だと感じて家路につく。

十二月十四日から十八日。長崎県の大瀬戸のK寺に法話の旅に出た。長崎県は初めてである。大瀬戸は陸の孤島のような所であつたそうだが、今では長崎空港から車で一時間半で行ける。あたりの風景は私がい

た飯島のそれと大差はない。五日間にわたる報恩講でお参りも多く、しかも真剣に聴聞して下さい。日頃のご住職の教化の努力が大きいと思われる。このお寺には住職の企画で雅楽を練習している門徒のグループがあつて、総勢十人余りが修行に参加して楽を演奏する。寺専属の楽団の如くである。演奏はあまり上手とは思えないが、なにせ規模が大きいので迫力があつて、修行はいやましに「有難い感情」をかき立てられる。法要中の法話は朝と夜の2回だけ

なので、あとはたつぷり時間がある。部屋に閉じこもっている私を、住職が近くのキリスト教徒の多い村に案内して下さい。いわゆるキリスト教の伝統のある所である。遠藤周作の代表作「沈黙」の舞台にもなつたところで、昨年「遠藤周作文学記念館」が建てられていた。中を見学し、遠藤文学を視覚的に味わつた。館は実に見晴らしのいいところに建てられていて、この夕日は最高だといわれたが、このときは雲が多くて見えなかつた。またその村の中に「歴史民族資料館」があり、中にいろいろ民具が展示されていたが、なんといつてもキリスト教の弾圧の中で生き抜いてきた人たちの遺物と明治になって彼らに奉仕したフランス人のド・ロ神父の行蹟が大変興味深かつた。明治の初めまで弾圧は過酷に行われてきたのであり、その中でキリスト教の信仰(多少変形されたにしても)を保持し続けてきたのは驚きである。前から一度、隠れキリシタンの郷を訪れたいと思つていたが、図らずも実現して嬉しかった。

十二月二十二日。念佛寺報恩講。富田林市の松山正澄師から法話をいただいた。人はどこに「私のおり場所」を見つかることが出来るかについての具体的な分かりやすいお話しであつた。

平成14年度御年忌年回表

137回忌	平成13年	亡
123回忌	平成12年	亡
110回忌	平成11年	亡
97回忌	平成9年	亡
84回忌	昭和58年	亡
71回忌	昭和45年	亡
58回忌	昭和32年	亡
45回忌	昭和19年	亡
32回忌	昭和6年	亡
19回忌	昭和13年	亡
6回忌	昭和40年	亡
23回忌	昭和27年	亡
10回忌	昭和14年	亡
27回忌	昭和21年	亡
14回忌	昭和8年	亡
1回忌	昭和5年	亡

(23回忌と27回忌を合せて25回忌に勤める場合があります。)

歎異鈔 第十一章第七講

つぎにみずからのほからいをさしはさみて、善悪のふたつにつきて、往生のたすけ・さわり、二様におもうは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこころに往生の業をはげみて、もうすところの念仏をも自行になすなり。(第十一章)

(口語訳) その次に、自力にもとづく意図を心中に抱いて、自分の行為における善と悪との二つについて、浄土への往生に際し、善行はその助けになり、悪行はその妨げになると二通りに分けて思うのは、弥陀の誓願の不思議さを絶対的に信頼しないで、自分の考えにより、往生のための修行を努力してやり、申すところの念仏までも、自己の修行のためになすのである)

浄土への往生は、「我が名を称えよ、浄土に生まれしめん」と誓われた阿弥陀の誓願不思議を信じて一向に念仏申すばかりの道である。ところが、念仏申すだけでは我が往生はあやういと思ひ、念仏の外に他のもろもろの善行を添えて行うことによって、浄土への往生を確実にしようとはからう。あるいは念仏申しながらも悪を為したり煩惱が強いと、これでは浄土往生はどうであろうか、できないのではなからうかと、自らの悪によつて往生が妨げられると思つてしまふ。これらほどもちからも弥陀の誓願不思議を未だ信じていない姿である。

念仏申しながら、念仏だけでは浄土往生はあやういと思ひ、外のもろもろの善行を加えることを法然聖人は「助をさす念仏」とご批判された。法語に

「本願の念仏は、ひとりだちをさせずて助とささぬなり。すけさす程の人は極樂の辺地に生まる。すけと申すは、智慧をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさす也」

念仏だけでは不足と思ひ、不安に思つて、念仏の外に智慧を助けにしようとして学問に励んで助かろうとする、あるいは念仏の外に戒律をまもつて自らの生活を慎み、それによつて浄土往生を確かなものにしようとする。あるいは念仏しつつ堅固な求道心をバネとして浄土往生を遂げようとする。あるいは念仏しながら利他的行為を積んで阿弥陀の心に適おうとする。

こういうことは念仏だけでは不足に思ひ、弥陀のご本願を頼りなく思つてゐるのである。本願を軽んじてゐるのであり、疑つてゐるのである。

弥陀願力の不思議をおぼつかなく思つてゆえ、「わがこころに往生の業」を励んで往生を定めようとする。私の善行を足しにしようとし、逆に悪や煩惱を往生の妨げとして恐れるのである。

私の(往生の業)は弥陀がなしたもうたのである。その徴が弥陀成仏の姿である。久遠の弥陀が法蔵菩薩となつて我が浄土往生の業因をすべて仕上げた下さつた。

私どもを「完全に浄化し、真実と一つ

になしたもう境界(浄土)へ至る」、そのための資糧はすでに成就されてゐること、そしてその成就によつて、「私の罪悪性はすでに完全に取り除かれ、私の死は完全に克服されている」という恵みが告げられてゐる。その告知が南無阿弥陀仏の御名である。唯信鈔文意に

「この如來の尊号は、不可稱・不可説・不可思議にましまして、一切衆生として無上大般涅槃にいたらしめたまう、大悲のちかひの御なり」

大般涅槃こそ、私たちが仏陀と同じ悟りを完成し、永遠の真実と一体とならしめられる境界である。

大無量寿経には、法蔵菩薩が私たち一人一人のために浄土往生の業因(たね)をしつらえてくださった行業が説かれてゐるので、それを現代語訳で以下に引用したい。この法蔵の願行こそ、私たちが心して聞かねばならぬところである。ここをはずすから、「私がどうかならねば」といつまでも計らうのである。すなわち阿弥陀仏のご恩の深さが知れず、疑いの中に閉じこもつていくのである。

『阿難よ、そのとき法蔵菩薩は世自在王仏のおそばにあり、さまざま天人・魔王・梵天・竜などの八部衆、その他大勢のものの中で、この誓いを立てたのである。そしてこの願を立ておわつて、国土をうるわしくとのえることにひたすら励んだ。その国土は限りなく広大で、

何ものも及ぶことなくすぐれ、永遠の世界であつて衰えることも変わることもない。このため、はかり知ることのできない長い年月をかけて、限らない修行に励み菩薩の功徳を積んだのである。』

貪りの心や怒りの心や害を与えようとする心を起さず、また、そういう想いを持つてさえいなかった。すべてのものに執着せず、どのようなことにも耐え忍ぶ力をそなえて、数多くの苦をもつともせず、欲は少なく足ることをして、貪り・怒り・愚かさを離れてゐた。そしていつも三昧に心を落ちつけて、何ものにもさまたげられない智慧を持ち、偽りの心やこびへつらう心はまったくなかつたのである。表情はやわらかく、言葉はやさしく、相手の心を汲み取つてよく受け入れ、雄々しく努め励んで少しもおこたることがなかつた。ひたすら清らかな善いことを求めて、すべての人々に利益を与え、仏・法・僧の三宝を敬い、師や年長のものに仕えたのである。その功徳と智慧のもとにさまざま修行をして、すべての人々に功徳を与えたのである。

空・無相・無願の道理をさとり、はかりを持たず、すべては幻のようだと見とおしてゐた。また自分を害し、他の人を害し、そしてその両方を害するような悪い言葉を避けて、自分のためになり、他の人のためになり、そしてその両方のためになる善い言葉を用いた。国を捨て王位を捨て、財宝や妻子などもすべて捨て去つて、すすんで六波羅蜜を修行し、他の人にもこれを修行させた。このようにしてはかり知れない長い年月の間、功徳を積み重ねたのである』

この法蔵菩薩の物語に、阿弥陀仏のかぎりない慈悲、私のための広大な(苦勞、大悲の真実があふれている。「我が名を称えよ」の仰せは、このご苦勞を背景として私どもに喚びたもうのである。(了)

念仏問答

P「住職さんからいつも、阿弥陀様は（そのままなりの汝を助ける、まかせよ）と仰せ下さると、お聞きしています。得てして（これでよいのかしら）と思ひ悩みます」

D「阿弥陀仏のお助けは当たり前のことではありません。ですから阿弥陀の本願は私どもが聞いて（ああそうですか）と納得できるような道理などではありません」

P「毎日々々、煩惱丸出しのお粗末な生活が続いていくしかない私に、（そのままなりで涅槃の領域に生まれさせる）という阿弥陀の誓いは、私たちの知性の分別で（ハイそうですか）と受け入れられるような話ではないのですね」

D「阿弥陀の誓願は仏陀の覚りの智慧である無分別智から現れ出た救いの言葉ですから不可思議といわれるのです。ですからただ（ああ不思議なこと）と信受するばかりなのです」

*
P「阿弥陀の本願に対して（私のいまのまままで本当にいいのか）とまどいます」

D「あなたが（これでよいのかしら）と思ひまどうのは、なお阿弥陀の不思議な誓願を疑っているからではないでしょうか」

弥陀の広大な願力を私の思いの枠組みの中に入れようと、極く小さな私の思いで（阿弥陀の本願はほんまかどうか）（ほんまだとしてもこのままの私でよいのだ

ろうか）と思索しているのです」

P「自分の思索をたのみに行っているのですね」

D「ええ、私どもの思索が間に合うように思っているのです」

*
P「それに、お念仏を忘れがちで困ります」

D「お念仏を忘れるのは凡夫の性です。忘れることを嘆くよりも、忘れ通しの私に一声でも称えられたら、忘れどうしの私にもかかわらずあいにくでござる阿弥陀様よと、いただかれてはいかがですか」

P「念仏を忘れていると、阿弥陀様のお目当てからもれているのではないかと思われてなりません。一声でも私から出るお念仏ではないのに、一声でも申されたら、それは阿弥陀様が私のことをご心配下さるお慈悲の現れなのです」

D「ええそうです。その出て下さるお念仏が、あなたを助けるあなたの阿弥陀様です。おひつにあるご飯はみんなのものですが、茶碗に盛られて与えられたご飯はあなただけのもののように、口に出てくださるお念仏はあなたを助けるあなたの阿弥陀様です」

*
P「お念仏申す者が如来様のお目当てなのです」

D「正確に言いますと（そうではありませぬ）と言わねばなりません」

P「どうしてですか。阿弥陀仏は（我が名を称える者を、必ず救う）とお聞きしています」

D「それは念仏申す者と申さない者とを選別して、申す者を目当てに救うと言われるのではありません。むしろ一切選別

せず、その人のありべのままなりを救うという万人救済の思召しを（我が名を称えよ）と示されたのです」

*
P「今の我が身の現実を受けとめるのは、お念仏しかないのです」

D「そうです。私の自我では辛い現実を受けとめることはなかなか出来ません」

P「自我は私の普段の心と言っているのでしょうか、なぜ自我では辛い現実を受けとめることが難しいのでしょうか」

D「凡夫の自我の心はとかく私の都合を中心に物事を考えます。ですから人生に對してつねに（私の思い通りになるように）とはからっています。ようするに、私にとつて都合のよいことは喜んで受け入れますが、都合の悪いことは避けたり逃げたり拒んだりします」

P「そうすると自我の心は私にとつて都合の悪い現実をすなおに受けとめず、嘆いたり、怒ったり、失望したりするのですね」

D「そういう自我では受けとめることのない現実や我が身を、私の思いはどうであるうとも、すでに受け取って下さっているのが阿弥陀仏の攝取受容です。阿弥陀仏の大悲受容のお働きは、私の現実の全体を受け入れて下さっていて、（お前がどうなるうとも、お前を見放さず受け入れて見捨てない。浄土に連れて行く）と仰せ下さるのです。その仰せが南無阿弥陀仏のみ言葉なのです」

*
P「今一度、南無阿弥陀仏のみ言葉とは？」

D「ええ、（助ける、引き受ける）いわば（攝取して捨てない）というの仏の仰

せです。和讃に
へ攝取してすてざれば 阿弥陀となづ
けたてまつる」

と仰せられるとおりです」

*
P「お念仏申すことによつて、私を念じている仏様があいに来て下さっているのです」

D「というより、私の念仏申す行為に先立つて私の処に来て下さっているしるしが、お念仏の声となつて下さるお姿です。私を助けんとて念じ続けて下さる阿弥陀様が私に会いに来られている姿が、ナムアマダブツのお声の仏様です。私は阿弥陀様に念じていただく資格も、あいに来て下さる資格も全くない者、そんな私に寄り添つて喚びかけたもう、その現れがお念仏です」

P「私を念じて下さる、その念じたもう大悲のみ心が声に南無阿弥陀仏と出て下さるのです」

D「ええそういただいています。親鸞聖人はお念仏の御名に

（この如来の尊号は、不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生として無上大般涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のらかいの御なり）

という無上の功德を見、不可思議の大悲を仰いでおられます」

P「そうするとお念仏は私の現実を受け取りただけではなく、無上大涅槃というおさとりに至らせてくださる真実なのです。私はこのご恩をもっとも大事に聞かねばとあらためて思っています」

